

【ポスター発表】

## 介護老人保健施設における介護職員による 「その人らしさ」と「関係性」を大切にしたケアの実際

○ 岐阜大学 氏名 小木曾加奈子 (6904)

平澤泰子 (浦和大学短期大学部・7302), 阿部隆春 (東京都福祉保健局・7301), 佐藤八千子 (岐阜経済大学・7622),  
棚橋千弥子 (岐阜医療科学大学\*1・8124), 柴田由美子 (\*1・8123), 祢宜佐統美 (愛知文教女子短期大学・7930)

安藤邑惠 (\*1・1580)

キーワード3つ: その人らしさ, 関係性, 認知症

### 1. 研究目的

2003年の高齢者介護研究会による「2015年の高齢者介護」の報告書においては、認知症高齢者の特性とケアの基本として、「本人なりの生活の仕方や潜在する力を周囲が大切にし、その人の人格を尊重してその人らしさを支えることが必要であり、尊厳の保持をケアの基本としなければならない」と明記している。また、Tom Kitwood が提唱したパーソン・センタード・ケアは、認知症ケアに関してこれまでの「医学モデル」に基づいた認知症の見方を再検討し、認知症の人の立場に立った「その人らしさ：personhood」とそこにおける「関係性：relationship」を尊重するケアの実践を理論的に明らかにした。パーソン・センタード・ケアの実現のためには、その人の生活に着目をして、生活機能を重視したアプローチが求められる。つまり、生きることの全体像として捉えることが必要となる。生活機能の概念は、WHOの国際生活機能分類（以下、ICF）によって確立されており、介護保険上にもICFの活用が位置づけられている。ICFのすべての領域からのケアを検討することは、パーソン・センタード・ケアの実践となり、認知症ケアの質の向上に役立つ。

そこで、本研究は日々の生活の支援・援助を行う機会が多い介護職に着目をして、パーソン・センタード・ケアが提唱する「その人らしさ」と「関係性」を大切にしたケアの実践をICFの視点を用いて明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究の視点および方法

調査期間は平成23年4～6月であり、郵送法で行った。対象施設は、80床以上の東海4県の介護老人保健施設（307施設）であり、悉皆調査として実施した。調査対象者は、1施設に対して、認知症ケアに携わっている介護職5名（1,535名）である。人選は施設の事務局長又は看護介護課長に一任した。調査内容は、性別、年齢、資格（複数回答）などとした。介護職版認知症ケア尺度（以下、ケア尺度）は、ICFの3領域、27項目、81質問項目であり、各質問項目は5段階で評価する。「その人らしさ」及び「関係性」を大切にした関わりは、4段階で評価した。データの統計処理は、PASW STATISTICS 18.0を用い、「その人らしさ」及び「関係性」とケア尺度の関係については、重回帰分析としてロジスティック回帰分析のステップワイズ法を用いた。なお、有意水準は5%とした。

### 3. 倫理的配慮

事務局長または看護介護課長に目的および調査内容について口頭と文書にて説明をし、

介護職に対しては、文書にて説明をし、本研究に賛同をしなくとも業務上の不利益がないこと、個人名が特定されないこと、得られた結果は学会などで発表することを説明し、研究協力を依頼した。アンケートの提出をもって研究同意の意思確認を行った。なお、本研究は岐阜医療科学大学の研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

#### 4. 研究結果

有効回答は761名(49.6%)であった。女性は534名(70.2%)であり、平均年齢±SDは、 $36.3 \pm 10.8$ であった。資格(複数回答)は、介護福祉士は603名(79.2%)であり、ホームヘルパーは193名(25.4%)であり、介護支援専門員は104名(13.7%)などであった。「その人らしさ」と「関係性」を従属変数とし、ケア尺度における下位尺度を調整変数として、2項間のロジスティック回帰分析により、オッズ比を検討した。

「その人らしさ」と心身機能・身体構造の領域は、精神機能と神経系の構造はオッズ比1.413 ( $p < 0.001$ )、音声と発話の機能と音声と発話に関わる構造はオッズ比1.284 ( $p < 0.001$ )、尿路・性・生殖の機能と尿路性器系などの構造はオッズ比1.294 ( $p < 0.001$ )であり、関係が認められた。活動と参加の領域は、コミュニケーションはオッズ比1.257 ( $p < 0.001$ )、セルフケア・排泄はオッズ比1.153 ( $p < 0.040$ )、主要な生活領域はオッズ比1.356 ( $p < 0.001$ )であり、関係が認められた。環境因子の領域は、態度はオッズ比1.603 ( $p < 0.001$ )であり、関係が認められた。

「関係性」と心身機能・身体構造の領域では、精神機能と神経系の構造はオッズ比1.367 ( $p < 0.001$ )、音声と発話の機能と音声と発話に関わる構造はオッズ比1.306 ( $p < 0.001$ )であり、関係が認められた。活動と参加の領域では、コミュニケーションはオッズ比1.216 ( $p < 0.003$ )、主要な生活領域はオッズ比1.403 ( $p < 0.001$ )であり、関係が認められた。環境因子の領域では、態度はオッズ比1.456 ( $p < 0.001$ )であり、関係が認められた。サービス・制度・政策はオッズ比1.236 ( $p < 0.001$ )であり、関係が認められた。

#### 5. 考察

心身機能・身体構造の領域では、感情失禁や興奮に対応するケアを行うことと、何を言っているか分からない利用者に対しても心から耳を傾けるという実践が、「その人らしさ」と「関係性」を大切にされたケアとして実践されていることが明らかになった。活動と参加の領域でも、コミュニケーションの大切さが示されており、認知症高齢者のBPSDを低減させるためには、非言語的コミュニケーションの活用が重要であることが示唆される。また、環境因子としては介護職員自身の態度として、利用者にとっては何が大切か考えることや利用者のペースに合わせる実践がされていた。認知力が低下することで、介護職員との意思疎通が困難となり、日常生活にさまざまな困難が生じるが、情動・行動様式・周囲とのつながり・愛着・個別性に着目をしたケアは「その人らしさ」と「関係性」が尊重され、保たれることに関係があることが明らかになった。

文献：安藤邑恵・小木曾加奈子(2009)『ICFの視点に基づく高齢者ケアプロセス』学文社。